

第2節 実況中継で2つのワークを解説

1 2つのワークの 全体の流れと準備のコツ

多くの場合、ワークシートを用いるグループワークを実施するための手順等の解説文は、8ページと10ページで示したような形式になります（時にはタイムテーブルがつくこともあります）。研究授業の指導案も同様ですが、それを読めば同レベルの授業を再現できるのでしょうか？ 答えは、否です。

解説文や指導案では伝えきれない、コツや考え方や授業者のこまごまとした配慮があるのです。そこでこの本では、より丁寧に説明して、皆さんが現場で実践するときの成功率をできるだけ向上させるために、「実況中継風解説」とエピソードや背景となる考え方を紹介します。

他のグループワークのすべてについても同様に説明しようとしたのですが、それではこの本のページ数が何倍にも増えてしまいます。そこでこの本では、私が最もおすすめしたい「座席表づくり&担任自己紹介」だけを丁寧に述べ、他のグループワークに関する「実況中継風解説」は、ワークシートのデータをダウンロードしてもらうために開設する、ほんの森出版のホームページのオンラインサイトに格納することにします（本書の紹介コーナーから入れます）。発売後も追加修正していくつもりです。質問等がありましたら、その回答も追加しようと思います。ときどきチェックしてみてください。

全体の流れ

「座席表づくり&担任自己紹介」は、入学式直後の学活やホームルームで実施するのが最も楽しくて、衝撃的な効果を期待できます。もちろん、新入生以外の新年度のクラス開きでも効果的ですし、教科の授業の1回目でも役立ちます。特に選択科目の授業などでは有効です。さらには、後述しますが、夏休みなどの長期休み明けにも有効です。

その大まかな流れは「座席表づくり」を15分ほど実施して、そのあと「担任自己紹介」も15分程度。あわせて、40分くらいで実施できます。50分授業の中に余裕を持って入れることができます。

準備のコツ

準備はワークシートを印刷するだけです。とはいえ、以下の点に気をつけ

てアレンジしてください。

「座席表づくり」

データで提供するワークシートは9ページに示したように「横6列、縦7列」の座席表です。これをもとに、皆さんが実施する教室に合わせてアレンジしてください。最近ではテーブル席の教室も増えてきました。オンラインサイトにはテーブル席用のワークシートもアップしてあります。こちらも参考にしてください。

「担任自己紹介」

11ページに紹介したワークシートは、私が高校教諭のときに使っていたものです。挙げている項目、挙げていない項目にはいろいろな意図があります。

自分=担任の特徴を子どもが興味を持つように伝える

まず、「星座」を挙げたのは、「生まれ月」より「星座」のほうが子どもたちは興味を持つからです。子どもたちは星座のイメージや自分との相性などを考えるようです。

「血液型」も、子どもたちが興味を持つからですが、私の場合、子どもたちの予想が外れることが多いので、クイズとして盛り上がりやすい利点がありました。答え合わせのときに「A型だと思う人は手を挙げて」「B型だと思う人は？」と手を挙げさせて板書すると、A型という予想が一番少なくなります。そこで「正解はA型です」と言うと、「えーっ!？」と盛り上がります。

「あることのプロでした。それは何？」は、私のユニークな部分を紹介するためです。「空手家でした」と言うと、子どもたちはびっくりします。

私の子どもの年齢を入れていたのは、娘が高校生前後のころです。高校生の生徒と年齢が近いと、「私と一緒に」と喜んでくれます。自分の年齢も「お父さんと一緒だ」と言われる時期には楽しめました。最近では、「おばあさんと一緒だあ〜」などと言われるので、ちょっと複雑な気持ちです。

避けたほうがよい項目

意図的に避けているのは「学歴」です。出身高校や出身大学・学部を出すと、子どもたちが劣等感を持つこともあります。「先生と私たちは違う」と感じると引かれてしまうこともあります。同様に、所有している自動車、自宅の位置や間取り、趣味などは、学校や子どもたちの状況を考慮して、項目として適切かどうか、よく考えてワークシートをつくるのが大切です。

また、先生の個人的な状況や考え方から、年齢や家族のことなどは話題にしたくない場合もあると思います。そんなときは、他の質問と入れ替えてください。それらを質問されたときには、明るく「パス」して、「お互いに答えたくないことはパスしましょうね」とモデルを見せてほしいものです。

2 ワーク開始！ 「座席表づくり」

直前の準備

私が「座席表づくり」を始めた最初のころの失敗。それは、教室の前方の掲示板に「座席表」と「名簿」を貼ったままにしておいたことでした。ワークを始めた直後に1人の男子生徒がそこに行って、書き写し始めました。すると、それを見た他の生徒が2人、3人と寄ってきます。

「これはまずい」と焦った私は、「あ、ごめんごめん。これはいったん、しまえますね。直接、その席にいる人に名前を聞いて書き込んでくださいね」と指示しました。おもしろくなさそうな顔をして戻る生徒たちの顔を見て、「失敗したなあ」と感じた瞬間でした。

ということがあるので、教室に座席表や名簿が掲示されていないか、直前に改めて確認しておきましょう。「掃除当番表」「週番表」なども、一時的に外しておくほうがよいと思います。入学式直後だと、座席表があちこちに貼ってあったり、場合によっては机に名前を貼ったりします。これにも気をつけたいものです。

私はこのワークをやり始めてからは、入学式の直後の座席表は、黒板に拡大コピーをマグネットで貼り付けて掲示するようにしました。このワークを実施するときは外し、終わったら掲示板に貼り付けるようにしました。他にもワークを阻害するものがあるかもしれませんので、点検しておきましょう。

いよいよ始めます

小中高校では、普通、「起立、礼、着席」と号令をかけて挨拶してから授業を始めるものだと思います。私の物理の授業では、始まりも終わりも「全員そろっての挨拶」は省略していました。表向きの説明は「時間の節約」でした。しかし、本音は、「起立、礼…」の号令は不必要に緊張を高めてしまう気がしていたからです。子どもたちにとっての安全安心の場を維持しながら、でも「休み時間」から「授業時間」へのスムーズな移行ができるように、以下の工夫をしていました。

スピード感を持たせる、子どもが揃うのを待たない

「じゃ、最初の授業です。お互いに顔と名前もわからないと思うので、少し周りの人の顔と名前を覚えるためのワークをやりましょう…」

なるべく大きな声を出さず、力まないように意識しながら話し始めます。話しながらワークシートを配ります。「後ろに回してください」と言うときもありますが、ほとんどの場合、指示がなくても子どもたちは反射的に後ろに回し始めます。小さいころからよく訓練されているものだと感心します。

このとき、時間の節約のためのコツがあります。最前列の子の前に立って、その列の人数を数え、「6人だね。イチニイサン…」と枚数を数える先生もいますが、これは時間をもったいないし、何より「けじめ」をつけた意味がないと思っています。私は、前もって各列の人数+1枚を束にして、直角にずらして重ねておくか、付箋紙などで目印をつけておきます。こうするとスピーディーに配付できます。グループ席の場合でも同様に、あらかじめグループごとに数えておいて、ポンポンと各テーブル上に置いていきます。

さらに、全員に行き渡る前に、説明を始めます。「手元に来たら、座席表の中の自分の席を見つけて、自分の名前をフルネームで書き込んでください」という具合です。

聞き逃しは「対話のきっかけ」

このやり方をするると、子どもたちがワークシートが回ってきて次の指示を待つ間にざわつくということがほとんど起きません。

「えっ、何をするのですか？」という質問はときどきあります。これに対して私は、「隣近所の人に聞いてみてください。わかっている人は教えてあげてください」と返事をします。この言い方は大事です。できるだけ批判的にならないように言うことを心がけています。

そうすると、わからない子どもは、周りの友だちに質問することが当たり前になってきます。困っていそうな友だちに「困っているなら教えてあげようか？」などと声をかけるのも日常的になってきます。つまり「対話的な学び」のきっかけになってきます。

先生に「質問しなさい」「教えてあげなさい」と指示されて「対話らしき会話」が始まるのは、どうも「主体的」とは言いにくい気がします。「不足気味の説明」と、遅れがちな子どもを「先生が待たない」ということが、「対話的な学び」と「主体的な学び」を引き起こすと感じています。

同じことが、教科授業でも言えます。その意味では、「短い説明」「繰り返しをしない」「質問に直接回答しない」などのスキルは、担任としても授業者としても、「主体的な学び」「対話的な学び」を促進するのに役立つスキルだと考えています。

3 子どもたちを動かすコツは、 短い説明と沈黙

短い説明と沈黙

ワークシートを配付して、なるべく間を置かずに次の説明をします。

「ワークシートの座席表を見て、自分の席の位置に自分の名前を書いてください。フルネームで、漢字で書いてください」

「ワークの内容は、空白の座席表をできるだけ埋めることです。それぞれの席にいる人の名前をフルネームで書き込んでください」

「ただし、条件が1つあります。『必ず、その人に直接聞いて書く』ということです。直接その人に漢字の書き方や読み方も聞いて、自分でワークシートに書き込んでください」

「やり方について何か質問がありますか？ ないですね。では、15分間くらいをめどに行います。始めてください」

以上の説明は、ゆっくりやっても1分くらいで終わります。これ以上の説明はまったく必要ないと思っています。説明を終えて、スタートの指示をしたら、先生は沈黙します。すると、子どもたちは動き始めます。

ここでもし、先生が補足説明を始めるとどうなるでしょう。例えば、

「まあ、まずは隣近所の人から聞くといいですね。隣同士とか、前後とか。それが終わったら、立ち歩いていいからね。立ち歩かないと聞けないからね」

このように説明したいと思われるかもしれませんが、しかし、このような説明が続くと、子どもたちは、スタートの出鼻をくじかれます。

子どもたちを動かすコツは、「短い説明と沈黙」です。教科の授業での話し合いや作業などのワークの指示についても、同様のことが言えると思います。

子どもたちはスタートの指示を聞くと、まずは隣同士か前後の席で名前を聞き合います。すぐに声をかける子どももいます。たまたま両隣の友だちが反対側の友だちと話し始めたので、動けなくなる子どももいます。でも、気にしません。そのうち動き始めますから。